スイートプリキュア 大怪獣総攻撃

サイレント・レイ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝ゴジラｖｓビオランテ　Ｆ・ｂａｔｔｌｅ〟から月日が流れた夏のある日、海に沈んだフェアリーパークの海底から巨影が確認された。

そして再び活動を再出現したゴジラにハートキャッチプリキュアに代わって活動するスイートプリキュアが聖獣達と共に戦いを挑む。

目次

プロローグ　海没事故 ―― 1
第1話　追う者、解き放つ者 ―― 8

プロローグ　海没事故

――　防衛大学　――

「……昭和２９年、此の年、我が国は恐るべき災害に見舞われた……ゴジラである!!」

　此の時、自衛隊の将来を担う幹部になるであろう若き候補生達の為に立花泰三海将補による特別講義が行われていた。

「戦場と化した首都東京は一夜にて灰燼と化し、多大な犠牲を払いながらも先人達はゴジラを駆逐した。

　此が第二次世界大戦後、平和憲法の下に設立された保安隊…そしてその保安隊を再編されて誕生した我々自衛隊の初実戦である」

　現時点で見た処、講義の内容はゴジラを踏まえた自衛隊の歴史である様だった。

「だが此の戦いは世界近代史に置いてキングコングとアメリカ軍との戦いから始まった怪獣と人類の戦いの一端にすぎず、世界的にも未だにゴジラを初めとした怪獣達の存在が確認されている」

　立花は一端水を飲んで息を整えた。

「近年だけでもアメリカ・ニューヨークがゴジラに襲撃され、フランスではモン・サン＝ミシェルの礼拝堂がゴジラらしき怪獣に破壊されたとの未確認情報がもたらされている……」

「…ねぇねぇ、つぼみ」

「……何ですか、えりか？」

　不真面目な事に立花の講義に飽きてきた候補生の一人がノートを取りながら真面目に聞いていた学友に小声で話を始めた。

　勿論、その学友は迷惑そうであった。

「アメリカとフランスの奴って結局ゴジラだったの？」

「そんなの私知りませんよ」

「…それが襲撃されたアメリカとフランスの当事国は襲撃したのはゴジラだとしたらしいけど、日本の学者はどっちのも否定しているみたいだよ」

「詰まり両方共、襲った怪獣はゴジラじゃないって事、いつき?」
「それじゃゴジラはビオランテの一件以降何処に行っちゃったのかな?」
　実際問題、ビオランテとの二度の対決を初めとした出来事以降かなりの時が流れていたが自衛隊はゴジラの消息を完全に見失っていた。
　勿論、此の間ゴジラは活動を停止している（の筈…）ので都市部への上陸や原子力関連（原発や原潜）の襲撃等の新たな被害は無く、逆に先の襲撃で被害を受けた街々は復興を遂げていた。
「しっかし、今の自衛隊は情けないよねぇ～…。
　結果オーライだったけど二度のゴジラの襲撃の迎撃は殆ど失敗しているんだから」
「だけど保安隊はゴジラを倒せず、手柄泥棒をしたかもしれないんだよ」
「アレですか?
　一頭目のゴジラを倒したのは実はプリキュアだって噂…」
「…我が国も近年だけでもゴジラとビオランテだけでなく、神奈川県を中心に謎の怪獣や怪物の出現報告が多数ある上……ん?」
　小声で会話をしている者達に気付いて注意を促そうとした立花だったが、その直前に詫びを入れながら入室した部下が何かの紙を差し出した為にそちらに向いた。
「……出動命令?」
「はい、直ちに海没事故の調査に向かう様にとの事です」
「…講義終了!」
「気を付け!……敬礼!!」
　室長の号令下、軍隊（一様が着くが…）ならではの一糸乱れぬ行動をした候補生達を背に退室した立花は此の出動命令の内容に胸騒ぎを感じていた…

――　加音町・大型ショッピングモール　――

『臨時ニュースを申し上げます。
　先程東京湾海上遊園地・フェアリーパークが海没事故を起こしました。
　繰り返します……』
　同時刻、東京湾で発生した事故の一報がニュース番組を通して日本中に駆け回っていた。
『…幸いな事にフェアリーパークは整備休園中の為に人的被害は最小限ですみましたが、施設全てが海に沈んだそうです……只今入った情報によりますと政府はフェアリーパークの事故調査の為に自衛隊を出動させる事を決定いたした模様です』
「…ニャンですとぉーー!?!!」
「っ！　しぃーー!!!!」
「……にゃぷ～…」
　勿論、此所加音町の大型ショッピングモールでも大型テレビからニュースキャスター月影ゆりが読み上げている内容に誰もが驚き、ざわついていた。
　此の為、白猫・ハミィが叫んだのに誰も気付かなかった。
「フェアリーパークが沈没…」
「嘘!!　私あそこにすっごく行きたかったのに！」
　そしてその中に南野奏と北条響…伝説の戦士である二人のプリキュア、キュアリズムとキュアメロディもいた。
『…フェアリーパークは建設時から原因不明の金属融解事故が多発していた上、開園時に謎の怪人達や巨大生物に襲撃された事もあって今回徹底的な調査が行われる模様です……』
「…ねぇ、此の事件ってマイナーランドの仕業かな？」
「それは多分違うにゃ」
「どうしてなのハミィ？」
　真っ先に敵対する闇の勢力かと疑った響の疑問に奏に抱かれているハミィが周りに気付かれない様に小声で否定した。

実は先程から喋っているハミィは見た目…と言うか見るからに猫なのだが本当は異世界・メイジャーランドの妖精であるのだ。
「フェアリーパークには光の秘宝のレインボージュエルがあるニャ。だけどそれが破壊されてもいないし、奪われていないニャ」
ハミィの言葉に間違いは無く、確かにニュースで海自の先遣隊だレインボージュエル（と思われる巨大シャコ貝）を発見して回収作業に入ったとの現場からの映像着きの一報が読み上げられていた。
「それに幾らマイナーランドでも一瞬でフェアリーパークを海没出来る筈がないしね」
「そうか……ん？」
響が奏に何かを返そうとしたが、人混みの中で何かを見付けた。
「……エレン？　奏、向こうにいるのエレンじゃない？」
「…あ、本当にそうね」
響の指し示しながらの言葉に従って奏が振り向いた先に……確かに自分達の知人の黒川エレンがニュース映像を見詰めていた。
しかもエレンは何処か顔色が悪かった。
「本当!!　セイレーン（エレンの別名）がい、もがもが！」
そしてそのエレンに響と奏が声を掛けようとしたが、ハミィが大声で叫んだ為に響が慌ててハミィの口を押さえ、更にハミィの声に反応した周囲の人達を何とか誤魔化した。
「駄目じゃないハミィ」
「御免ニャ…」
「…っ！　響、エレンがいない！」
その間にエレンは何所かに行ってしまった…

――　東京湾　――

此の時、フェアリーパークが存在していた海域に海上自衛隊の最新

鋭護衛艦『あいづ』を初めとした艦艇が停泊して救助活動を行っていた。
　更に護衛艦群に搭載されていた特殊深海作業艇『さつま』から送られてくる映像の確認作業をしていた。
「…酷い有様だな」
「本当にそうです」
　艦長以下の乗組員達はフェアリーパークの残骸が散乱している光景に顔を顰めていた。
　特に妖精を模った遊具が横転して半ば埋もれているものなどは取り分けて酷く、後日マスコミに公開されて此の事故の象徴的な物となった。
「…『さつま』一号機より通信、レインボージュエルに浮き袋の設置作業が終了したそうです」
「では二号機と共にフェアリーパークの土台へ向かわせろ」
　二隻の『さつま』が「了解!」と返事をして暫く経った後、根元から無残に折れたフェアリーパークの土台と海底の映像が映し出された。
「…海没の原因は此だな。
　根元を破壊されたんだな」
「ですがおかしいですね?」
「……どうした?」
　『あいづ』航海長の南瞬が破壊痕に疑問を感じ取った。
「……此の部分を見て下さい。
　まるで中から何かが這い出た様な感じです」
　瞬が示した場所に破壊のプロ（そう言って良いのか?）である彼等は明らかに爆破物でのものではないと見抜いた。
「…では此の破壊痕から何が出てきたのだ?」
　残念ながら艦長の疑問に誰も答えられなかった。
「まさかフェアリーパークを襲ったって言う例の海坊主じゃないですか?」

「否、まさか…」
場を和ませようとした乗組員の一人の冗談に苦笑がそこそこ聞こえてきた。
「…兎に角、もっとも『さつま』に調査する様に命じる必要があるな」
瞬以下の乗組員達も同意の意を示すのを確認した艦長が実際に命じようとしたその時、一斉に二つの映像が……否、『さつま』が揺れ始めた。
「どうした!? 何が起こっている!?」
「……大海流です！」
「っ！ 直ぐ『さつま』を避難させろ！
急げ!!」
艦長の命令を聞くまでもなく、『さつま』は二隻共避難行動を起こしていたが…
「ああ!! 二号機が！」
…僅かに行動が遅れ、しかも更に操作を誤った二号機が残骸に接触して爆発した！
只、一号機は二号機の最後を映しながら大海流に揉まれながらも無事であったが…
「っ!! 何だ、今のは!!?」
…その直後、一号機の船外カメラに一瞬何かが写った事に瞬が気付いた。
そして他の乗組員達や一号機の搭乗員達もそれに気付き、大海流が収まってきた事あって再び写し出されたそこに…
「っ!!」
「こ、此は!!?」
…そこに残骸と砂煙に紛れて海底を這うように進む背鰭が多数立ち並んだ黒い背中に太く長い尻尾が存在していた。
幸い……と言うべきか、此等は『さつま』一号機から離れようとしていた。
「……『さつま』一号機、『さつま』一号機！……」
どう考えてもフェアリーパークの海没に関連していそうな……そ

れも彼等自衛官何処か日本人なら容易に正体が予測出来るものを見た事もあって艦長が『さつま』一号機への通信マイクを取った。
『ひかり、早く立て直して!!』
『分かっています!
それより薫さん、今の見ましたか!?』
…だが『さつま』一号機に乗り込んでいる九条ひかりと霧生薫は搭乗機の現状に加えて、カメラ越しに見たものから軽い騒ぎを起こしていた……まぁ、分からない事もないが…
「…薫!! ひかりでも良い!!
状況を報告しろ!」
『瞬ですか! 私達と『さつま』は大丈夫です!』
艦長からマイクを奪った瞬の怒鳴りながらの質問に薫が無事を報告したので取り敢えず全員が安堵の息を吐いた。
「…南!!」
「っ!! 艦長、失礼しました!」
思わず自身がやった行為に瞬は謝罪して艦長にマイクを返した。
「霧生、先程カメラに映った移動中の物体は何だ?」
『……艦長…自分の目が信じられません!』
『あいづ』の乗組員の誰もが大災害が起こるであろうと否応なく予感した。

第1話　追う者、解き放つ者

――――――
?????
――――――

此の時、既に真夜中と言える時間帯にも関わらず、地元の人々すら基本的に寄付かない〝魔境〟の単語が完全に当てはまる場所の入口に大型バイクに跨がった女性がいた。

此の女性、ヘルメットのフェイスカバーを上げて闇夜で全く見えない筈の山中を見ていた。

「…此の先ね。

見た処、このまま行けそうね」

女性は地図を取り出してバイクのライトに当てて山道を確認した。

そして地図をしまってカバーを下ろしたら、街灯何処か舗装の〝ほ〟も無い山道にバイクごと進入して行った。

「…チョット、待って!!」

…それと同時に女性を追い掛けて来たワゴン車がほぼ入れ違う形で到着したが、ワゴン車の面々は不気味な環境に加えて車が入れない事から全員が怖じ気付いて立ち止まっていた……

数刻後、女性が入り込んだ山中の最深部に聳える愛乃山の山中に古い社が存在していた。

否、此の社は苔と蔦に全体が覆われ、屋根が半ば腐れ落ちてしかも周囲が草や木が生え放題の状態を見たら、最早存在〝していた（過去形）〟と言うべきであった。

此の為、此の社は本来は神聖なる場所にも関わらず、愛乃山ごと地元の人々からホラースポットとして恐れられていた……まぁ此の現状を見たらそう思われても仕方なかったが…

だが此の場所に不思議な服装の少女が立っていた。

此の少女、暫く社を見ていたが、不意にその社に入った。

少女は社の壁に掛けられていた天女と思える女性の絵を手に触れて何回か撫でた。

そして少女は絵から離れて社の奥に存在している〝米〟の様な紋

章が刻まれている石柱に近付き腰に携えていた短剣を手に取って何にもためらう事無く突き刺した。
石柱が短剣の刺さった場所から放射状に罅が入り……砕け散った
その時、先程の女性がバイクごと社に乗り込んで来た。
「…此所で何をしているの!?
こっちに向きなさい！」
女性の問い掛けに何も答えなかったがバイクのヘッドライトに照らされた少女は指示に従って振り向いた。
そして女性は少女の顔を確認して…
「…っ!! やっぱり貴女だったの！」
…女性の予想通りの人物であった。
「…貴女、桃園山に続いて此の愛乃山で何を……?…っ!?」
…少女に問い掛けていた途中で突然何かの鳴き声が聞こえたと思ったら愛乃山が大きく揺れた。
「〜〜…あ!!」
此の揺れに女性が戸惑っている隙に少女は脇に走り出し……そのまま崖から飛び降りた。
「ま、待って!!」
揺れが収まった事もあって女性もバイクから飛び降りて少女の後を追い、少女が飛び降りた崖の下を懐中電灯で照らした。
「……っ!?」
すると照らした遥か先に少女が何事も無かったかの様に女性を見上げていたのだが……問題は少女が巨大な何かに乗っていたのだ！
「……ふっ」
不意に女性へ微笑んだ少女は身体をバク転をしたら、巨大な何かが少女が身体を丸めるのとほぼ同時に身を起こして口の中に含むと直ぐに巨体を揺らしながら地中の中に潜って行った…

―――　数日後・加音町　―――

海上遊園地フェアリーパークの海没事故のニュースが流れてから数日後、海没事故の続報が流されない事もあって此所…西暦１７７９年の江戸時代に楽器職人・調辺音右衛門が開いたとされる日本最大の音楽の町・加音町は少なくとも平穏を取り戻していた。

そして加音町は此の町最古のイベントの加音神楽祭の準備が執り行われていた。

「…よ―し、休憩！」

「……あ～～…」

「お疲れ、響」

そして此の祭のメインイベントである神楽舞の練習を時計塔広場に設置された舞台でしていた響に奏が飲み物を差し出しながら労っていた。

「…随分しんどそうね」

多くの運動部を助っ人として引っ張り凧になる位の運動神経と体力を持っている響が舞台から降りてグッタリと椅子に座っている姿に奏は少し驚いていた。

因みに本来は西洋楽器が絶え間なく流れている加音町だが此の神楽祭の本場だけでなく練習と準備の期間だけは横笛や和太鼓等の日本楽器が響き渡っていた。

「…だって神楽舞って見た目に反して物凄くしんどいんだよ…」

奏に愚痴を零す通り、神楽舞は凄まじく体力を消耗するだけでなく、響は本番と同じ条件…暑く動き辛い衣装を纏い、更に重い冠を載せていたのだから尚更であった。

オマケに現在の真夏の晴天日で無風の状態がより響を苦しめていたのだ。

まぁ、それ等の事を奏も察して、黙って響の愚痴を聞きながらタオルを煽ってあげていた。

響が気持ち良さそうな表情であった事もあって何処か微笑ましい

光景であった。
「お～い、響！
練習再開だよ！」
だが直ぐに休憩時間が終わり、親友の西島和音が先に舞台に上がって響を呼んでいた。
「響、頑張ってね」
「おお!!　此所で決めなきゃ女が廃る！」
休憩で息を吹き返した響は先に舞台の和音のいる所に意気揚々と向った。
又、運動神経抜群である和音も響と同じ衣装を纏っており、和音は響と共に踊る予定だ。
「それじゃ、行って来るね」
「ええ、頑張ってね」
完全回復して元気よく舞台に向って行った響を奏は手を振って見送った。
響が舞台に上がって和音と配置に着いて身構えたら曲が流れると同時に踊り出した。
暫く響と和音の指導を受けながらの神楽舞を奏は見ていたら…
「…あら、今年は北条さんと西島さんがやるのね」
「っ！　聖歌先輩!!」
…奏が所属するスイーツ部の部長である東山聖歌が彼女に近寄って声を掛けて来た。
「中々良い人選ね。
特に北条さんがやるとなら尚更ね」
「はい、ですが響は嫌がっていたんですが」
加音町神楽舞はその踊り手は奏達が通う聖アリア学園の女子生徒から選ばれており、今回響が選ばれた理由は勿論運動神経が優れているだけでなく、彼女が母親のまりあはフランスを拠点に活動するヴァイオリニストで聖アリア学園の音楽教師を務め北条団は世界的有名な指揮者兼作曲家と音楽のサラブレッドである事もあった。
実際に響はまだ荒削りだがピアニストとしての才能があり、正に踊

り手に打って付けであった。
だが此の事に当の響は幼少期のトラウマから音楽を嫌っていて（現在はかなり改善していたが）踊り手になる事を嫌がっていたが奏を初めとした人達の説得を受けて渋々承認したのだった。
只、響が踊り手を引き受けた代わりに彼女の好物であるカップケーキをご馳走する為に奏は後日カップケーキを大量生産しなくてはいけなくなったが……その事に奏は殆ど日常的な事なので何も問題を感じていなかったが…
話を戻して、少し不純な動機で神楽舞の踊り手になった響だが少なくとも奏が見ている限りではかなり上手く、それも和音をリードしながら踊っていた。
「…聖歌先輩、どう思います？」
去年、此の神楽舞の踊り手の一人であった聖歌に奏は響達の出来具合を尋ねた。
「…中々良いわよ」
聖歌の言葉に奏は安堵の息を吐いたが…
「だけど北条さんは兎も角、西島さんは少し動作が遅いわね。それに時々ミスをしていますし」
…その次に手厳しいかったので表情が曇った。
しかし実際に和音は聖歌の言葉通り僅かであったが響とのズレがあり、しまいには足が縺れてふらついた為に止められて響と一緒に注意を受けていた。
「……少し厳しいのでは？」
「そう思われても仕方ないけど、加音神楽は全国レベルで有名だから下手な事は許されないからね」
聖歌が厳し目の評価なのも加音神楽は元々大和朝廷が執り行っていた古い歴史……と言うか古過ぎて何時出来たか分からない程のものが戦国時代の混乱から途絶えたのを音右衛門が時の天皇陛下と徳川将軍の許可の本に蘇らせた事もあって当日には日本全国から人が集まるのだ。
しかも情勢によっては総理大臣何処か皇室や天皇陛下まで…勿論

目の肥えた人達も多数訪れる為、文字通り下手にしたら日本中に大恥をかいてしまう事となる。
だからこそ前年にその重圧を耐えきって神楽舞をやり切った聖歌はその事を知るから厳しく言うのだ。
因みに音右衛門は加音神楽を復活させた後、此の神楽舞を参考にある事で有名（加音神楽とは別の意味で）な神楽舞を作り出していた。
…で話を戻して、聖歌の言葉に奏の表情が沈んでしまった。
「…でも心配しないで、北条さんは上手に出来ているわよ。
北条さんがしっかり西島さんを導いてくれれば上手くいく筈よ。
当日までに仕上げられる可能性は大いにあるわ」
「本当ですか⁉」
「ええ」
実際に聖歌の言葉通り、今回の響と和音のは聖歌から見ても問題無く踊っていた。
「南野さん、西島さんには悪いけど貴女がやったらもっと良くなるんじゃない？」
「そうだと良かったのですが、私は全く出来ませんでしたから…」
聖歌に言われる迄もなく、響に息が合う奏にも推薦があったのだが、残念ながら試しに神楽舞を奏にやらせてみたら奏が途中でバテてしまい、時間的にも奏の体力が改善不可能と判断した関係者達から失格を言い渡されてしまった。
此に響は何とか覆そうとしたが、当の奏本人が辞退した上に此の事で響と奏が大喧嘩をした為に結果、代わりに和音が選ばれたのだ。
「…全く響も私の事も分かってよね。
それに奏太も奏太もよ…」
喧嘩した事を思い出した奏が更に神楽舞が踊れなかった事（実は此の事を奏はかなり悔やんでいた）を先程神楽舞を覗きに来た彼女の弟の奏太に弄られた事もあってブツブツ文句を小声で言っていた。
しかも笑顔で胸元で右拳を握って小刻みに震わせていたから怖さが出ていた為に周囲の人達が奏に思わず振り向いた後、彼女から距離を置いていた。

因みに奏太はその後彼の同級生の少女・調辺アコと共に他の神楽祭の準備箇所を見に行っていたが、当のアコは余り乗り気では無さそうだったが…

だがそんな奏を聖歌は微笑みながら見ていた。

「……っは！　すみません、聖歌先輩!!」

「良いのよ…」

我に帰った奏は直ぐに聖歌に謝り、当の聖歌は笑って許していた。

「……処で先輩は何をしに来たのですか？

その木箱も一体？」

こう言う時、普段なら自作のお菓子を持って来る聖歌が古い……た処メロン位が丁度入りそうな木箱を持っていた為に奏が質問した。

「ああ、此。　北条さんが当日着ける予定の冠を持って来たのよ」

奏が納得して頷き、二人共響と和音の神楽を見付けていた。

だが木箱の中の物が不気味に点滅し出している事など知る訳がなかった。